

## DETAIL – 建築を紐解く専門誌

2009/3 – 音楽と演劇の空間

翻訳  
春田修作  
Shusaku Haruta  
E-mail: shusaku.haruta@web.de

山本 想太郎  
Sotaro Yamamoto



### 文化的な催事空間 実例に見る劇場建築の類型学的分析

フランツ・ヴィンマー + バーバラ・シェッレ

人々が群をなして何かを行う空間で、なおかつより劇的な演出を可能にする空間は、ある2つの要素を明確に描き出す。多数の、もしくはほんの僅かな「観衆」が、巨大な、もしくは小さな「舞台」の上の出来事を、目／耳にする。この2つの要素が如何にして建築的に、そして空間的にお互いに作用し合うのか、それは数限りなく存在する解答案を紐解くことで明らかになるだろう。講演であろうと、演説、演劇、演舞、映画、歌劇、オペラ、オペレッタ、コンサート、ミュージカル、ハブニング劇であろうと、それらは全て「劇的な」行為の方法や形式に違いがあるだけで、与えられた建築的条件に従わなければならないという本質では同じである。劇的な行為と祭儀的な行為の発展の歴史を遡ってみると、両者が綿密に結びついているという事実だけでなく、実は同義であったという結論に至る。そのためバウハウスで劇場と舞台の形態を研究したオスカー・シュレンマーは、劇場という存在を、カーニバルや、縁日、お祭りなどの大衆娯楽と、宗教的な礼拝行事との中間に位置するものとし、建築的に、もしくはシュレンマーの言葉を借りると「場所の形態」の違いとして考えると、名もない興行用の仮設小屋やテントと、建築的芸術の粋を集めて作られた寺院や教会などの宗教建築の中間の存在ということになるのである。20世紀を代表する劇的なプロジェクト『全体主義劇場（1926/27年）』の生みの親であるヴァルター・グロピウスは、1929年に発表した自身の根本的な理論を提唱した論文「劇場建築」の中で、劇場建築の発展の歴史には、3つの基本的な舞台の形式、すなわち舞台が中心に位置する円形舞台、古代ギリシャのプロセニウム型舞台、そして額縁舞台の3つが存在しないと主張している。そこに現代演劇の傾向である「空間の中で自由自在に演ずる」という概念、それをフリードリッヒ・キースラーは空間舞台というように定義しているが、この概念を4つ目の劇場形態として加えることによって、「観る」とことと「演じる」との関係性を解明する劇場建築のひとつの体系を明確に打ち立てることが出来るのではないだろうか。以下、劇場のタ

イプごとに様々な例を挙げてゆくが、それによって各時代のそれぞれ多種多様な存在感や、形状、特徴が明らかになると思う。ただし基本的なタイプの違いはあれど、それらの枠組みや共通点は往々にして融合しあっているものであり、最終的に我々が目にするものは、様々な「人が集まる建築」における『観客』と『演者』の千差万別の関係と交わり方なのである。

#### アリーナ – 円形舞台

アリーナ（ラテン語で「砂の広場」）は、劇場と呼べる存在の最も基本的な構成部分である舞台の原型である。演説や格闘、舞踏、そして宗教的な礼拝行事などを目撃、もしくは体験するために人々はこの平らな広場を囲む形で閉じられた円を作り出す。そしてより規模の大きい行事になると、全ての人間がその出来事を視覚できるよう自然が形成した窪地の斜面の高低差を利用するようになった。この形態の一番のメリットは、演者と聴衆の密接な関係、もしくは直接的な関係の構築であり、この「人間の壁」が結果として劇的空間を作り出すのである。このタイプの集会所が導く建築的な形態は、古代ローマのアンフィテアトルム（円形闘技場）に始まり、サーカス用のアリーナ、コンサートホール、学術的死体解剖の実演、スポーツ用のスタジアムなど様々である。

#### モライの地中劇場（ペルー）

先史時代～西暦1500年頃: 60000 席  
Earth theatre in Moray, Peru  
オリヤンタイタンボ城砦からピサクまで – インカ帝国の農耕文化の中心地であるウルバマ渓谷（ペルー、アンデス山脈）は全域が段丘面で形成されており、現在この地域には5つのモライ・アンフィテアトルム型劇場が存在する。この劇場は自然に形成された地形と、人造の文化的施設の中間に位置する存在であり、自然の段丘が、急斜面を描く地勢にまるでめ込まれた観客席のような存在として地形に溶け込み、結果的に4つの円形劇場が、さらにもうひとつの蹄鉄状のものと共に巨大な劇場群を作り出している。この円形状の広場は、インカ帝国以前の古代において文化的な野外祭祀場として、野外催事場として、または野外競技場として使用されていたとされている。最大級の「円形舞台」は直径

45 mを誇り、その段丘は全部で12段が現存しており、その高さ1.8 m、幅7 mという次元から推測すると、最大で6万人を収容したのではないかと考えられている。また発掘調査の結果、複雑な給水システムの遺構が発見されており、インカ帝国時代にはこの遺跡が、高標高下におけるトウモロコシ栽培用の施設として利用されていたのではないかと推測されている。

#### ノルマン・ベル・ゲディーズ

円の中の小さな劇場計画  
1922年: 600 席  
Norman Bel Geddes  
Little Theatre-in-the-Round project  
1920年代初頭、ノルマン・ベル・ゲディーズはいくつかの劇場をデザインしており、それが国際的な注目を集めるとロンドンとアムステルダムで個展が開かれるまでになる。彼のプロジェクトの特徴は、その当時の最新の劇場理念に、建築学的にみて現実的な構造を形にして与えようと試みたことで、流線型の建築と半球型の内部空間によって、観客席と舞台の融合を図ったのである。二重の壁構造が一目に主張するこの模型は、アリーナ型劇場のデザイン案で、まるでサーカスの会場のように、リング状の観客席が中心の円形舞台を囲んでおり、その結果、内側の壁によって構成されている空間に聴衆と舞台が一体となって存在する形になる。内側と外側の壁の間に関しては、観衆のための遊歩回廊としての機能を果たし、その上の空間は劇場機器と照明を設置するための空間となる。中央にある舞台はより華麗な演出のためその全体を垂直方に昇降させることが可能になっている。

#### ハンス・シャロウン

ベルリン・フィルハーモニー  
1956～1963年: 2000 席  
Hans Scharoun  
Philharmonie in Berlin  
「即興の音楽が鳴り響く至る所で、聴衆が一瞬にして輪をなすという事実は、ただの偶然なのだろうか？」ハンス・シャロウンはそう自問すると、このホールをデザインをする際に、先の考察を根本的な出発点としたのだ。2000人の聴衆をそれぞれ少数のグループに分解した上で、彼はそれを「Weinbergterrasse（ワイン畑段丘）」と呼

び、劇的な出来事が起こる場所である

「Tal (谷)」を囲ませた。さらに「Himmel (空)」には、重厚な天蓋屋根ではなく、繊細で軽やかな「Zeltdach (天幕)」を載せたのである。この建築は中心から始まり外に向かって広がりを見せ、コンサートホールの枠を超えてもホワイエを始めとする付加的かつ機能的な空間に滑らかに移行する。それぞれ異なった高さに配置された観客ブロックは、舞台に対して各々異なった展望が開けており、さらに音楽を集中して堪能できる環境が整えられている。そのためコンサートを訪れる観客は、同時に劇的な空間をも体験できるのである。このベルリン・フィルハーモニーは、シャロウンが彼独自の手法によって先史時代の野外催事場を、ひとつの現代建築に変換することに成功したということの意味している。

ジョバンニ・ミケルッチ  
ヴェネトのロンガローニ教会  
1966～1978年

Giovanni Michelucci

Chiesa di Longarone Venetia

ミケルッチは、自身のキャリアのすべてを劇場建築に捧げており、98歳にして、オルビア市のために大劇場と野外劇場を併設した芸術総合施設を設計している。1963年、ヴァヨントダム（フリウリ地方）の悲劇が起こる。地滑りによってダムをあふれ出した大量の水が濁流となって渓谷の全てと下流の村々を押し流し、多く命が失われてしまったのだ。この犠牲者を追悼するための慰霊碑建設の依頼を受けたミケルッチは、楕円形の閉塞空間である礼拝堂の上に重ねる形で天に向かって開放されたアリーナ型の劇場を設計する。この施設の外周をスロープが一回りし、クリプタ（地下聖堂）とその上に存在する祭事場とを結ぶ。その結果、他に例を見ない古代の野外劇場と宗教建築との特殊な深い結びつきを表現して見せたのだった。

### テアトロン - プロセニウム型舞台

テアトロンとは、ギリシャ語で「視覚する空間」を意味しており、本来は古代劇場の一定の角度で高さをだした観客席のことを指す専門用語であった。それまでの円形舞台に反して、観客が舞台を全方位的に取り囲むのではなく、舞台に対して扇形もしくは半円、半楕円形に席をとるようになると、合唱隊のための平坦なスペース（オルケストラ）が拡大され、さらに演者のための舞台（プロセニウム）が一段高い位置に配置されるようになる。続いて演劇のための壁、すなわち舞台背景が作り出されるようになり、結果的に舞台を取り囲まなくなったが故の観客席の形状の最善化、舞台環境の明確化、そして古代ギリシャ劇場の音響効果の継承、それらのすべての要素が、融合しあってひとつの形として発展したのである。そしてローマ帝国時代になると、地形にもはや左右されない移動経路システムの発案によって半円を描く形で観客席が形成され、またこのタイプの劇場が室内型の建築に改善されたのである。これらの伝統的な古代劇場における長所と特徴は、今日の劇場に対していまだに大きな影響を及ぼしている。

エピダウロスの劇場  
紀元前3世紀頃: 14000席  
Theatre in Epidaurus

エピダウロスの劇場は古代においてもすでに最も美しい劇場であると評価されていた。テアトロン完璧な規則性と、地形との完璧な融合の二つの要素が、この劇場に調和をもたらしているのである。この劇場施設は、聖地アスクレピオスの郊外に位置し、キノルティオン山の山麓に鎮座し、その立地ゆえに独特の音響効果の恩恵を受けたのである。観客席は、14000人の観衆がこの聖域を舞台背景として一望できるように岩盤を掘削して作られているが、このように古代ギリシャの劇場は自然の傾斜面を利用して作られており、結果的に観客席の角度も自然のそれに従うものとなる。そうすることで観劇のための空間は、周囲の地形に同一化し、建築の形状と自然環境の調和と均衡がとれたものとして成立したのである。劇場空間はやはり周囲にある地形に大きな影響を受けるものだと言えるだろう。

アテネのアグリッパ・オデオン

紀元前16～13世紀頃: 1000席

Odeon of Agrippa in Athens

この一般的に「オデオン」と総称される屋根が架けられたローマ帝国時代の劇場は、ヘラス（古代ギリシャ）の屋内祭事場の発展型であると認識されており、この屋根構造が室内の温度や湿度などの条件と音響にもたらしたメリットは絶大なものであった。またそれまでのローマ帝国時代の劇場と同じように、音楽的、もしくはパントマイムのな行事を行うための会場として機能したのである。アテネにはこのタイプの劇場が2つ存在していた。ひとつはヘロデス・アッティコス（西暦150年頃築）で、もうひとつはアテネのアゴラ（市民生活のうえで最も重要だった公共広場）の中央にそびえるアグリッパ・オデオンである。この劇場の中心部を構築しているのは高さ25mほどのほぼ立方体に近い空間で、その空間は舞台とオルケストラ、段差状に重ねられた観客席によって構成されていた。1000人の観衆を収容したカヴェア（ラテン語で「観劇用の空間」）は、最下段の列のみ半円を描いているが、それ以外は4角形の平面図に合わせるようにトリミングされている。また演劇用の空間はオルケストラの部分ではなく、プロセニウムと呼ばれるシェナエ・フロンス（装飾の施された壁で、この前で俳優達は演技をしたり音楽家が演奏をした）の前に広がる舞台の最前列の部分である。

アンドレーア・パッラーディオ + ヴィンチエント・スカモッツィ

ヴィチエンツァのテアトロ・オリムピコ

1580～1585年: 1000席

Andrea Palladio, Vincenzo Scamozzi:

Teatro Olimpico in Vicenza

1580年、人文主義に傾倒した貴族と芸術家が組織したサークル、アカカデーミア・オリムピカがアンドレーア・パッラーディオに古代以来初めてとなる、独立した屋内型の恒久的な劇場の設計を依頼、彼はウィトルウィウスが「建築十書」の中で陳述した古代の劇場

理論に基づいて、四角形の一体構造建築の内部に木造の古典的劇場を設計する。半楕円形のカヴェアは13段で構築されており1000人を収容、そして規則的に並んだ柱がこの観客席を装飾した。そしてそれに連続する空間として自然光を取り入れた回廊が設けられ、木造の天井には青空が描かれ、野外を連想させる働きを果たした。オルケストラは一段掘り下げられたレベルに設けられ、役者は観客と同じ高さに設けられたプロセニウムで演技をしたのだが、この舞台にはローマ帝国時代のシャナエ・フロンスの流れをくむ壮大な装飾背景壁（シェナ・スタビレー）が設置されていた。またこの壁には3つの開口部が設けられており、通常であれば舞台上とは呼べない舞台裏への視界が確保され、そこから伸びる5本の通路には背景が描かれた。これは観客の視的感覚を錯覚させることによって、物語が野外で繰り広げられているという状況をより強調することを狙う手法だったのである。

ウィリアム・シェイクスピア

ロンドンのグローブ座

1599年: 3000席

Shakespeare's Globe Theatre in London

近年復元されたグローブ座は、シェイクスピアが生きた時代にはロンドンの城壁の外に位置しており、これはこの劇場での上演を法的に禁止しようと何年も試み続けた王侯貴族の権力が、領地外であるがゆえに及びようがなかったことを意味した。約3000人の観衆を収容したこの劇場を、実に様々な社会的階級層の人々が訪れたため、もはや大衆のための劇場であったことに疑いの余地はないだろう。自然光を取り入れ、ボックス席とバルコニー席を設けたこの劇場の原型は、英国の「酒場の中庭のスペース」にあり、当時はここで役者が飲食客のために演技をすることが多かったのである。アリーナ席に舞台が大きく迫り出している事実にも左右されることなく、すべての観客席において、役者と観客の間に密接な関係が構築されるこの劇場は、後の空間劇場の原型ともいえる存在だったのである。

アルヴァ・アールト

オタニエミ工科大学のオーディトリウム（ヘルシンキ）

1955年

Alvar Aalto:

auditoriums of the University of Technology in Otaniemi near Helsinki

アルヴァ・アールトが1924年にイタリアとギリシャを訪れた際、彼は数多くのスケッチを残したが、そこにはデルフィやオリンピアの劇場を描いたものがあり、彼が如何にこれら古代の劇場建築群に感銘を受けていたかがわかる。1955年、彼はオタニエミの丘陵地帯に大学のキャンパスを設計するが、オーディトリウム群が視覚的に明確に主張されており、それがこの建築の基幹を成していることが容易に把握できる。古代ギリシャの劇場建築に見られるアイデアの数々を、20世紀のオーディトリウム建築に取り入れて再構築してみせたわけである。内部に間接的に自然光を取り入れたオーディトリウムの屋根の外側は、12段

からなる野外劇場のような観客席になっており、これは野外催事場であった古代劇場に影響を受け、その伝統的手法を取り入れたことを意味するのである。

### 額縁舞台（ドイツ語の「」）

額縁舞台とは、舞台の3面は壁などによって閉じられているが、最後の1面はプロセニウムアーチによって解放されており、その開口部から観客が観劇できるようになっている舞台のことを指す。17世紀に入りバロック文化が花開くと宮廷歌劇場が誕生し、それが発展していった結果、この額縁舞台という概念が生まれる。舞台が建築的に独立した空間に変化してゆくと、それは同時に舞台と観客が存在する空間との隔離を意味し、最悪の場合、観客はただの傍観者にまで最下がる傾向まで現れ始めた。視界や音響の有効範囲を超過せずに観劇という娯楽を可能な限り多数の観衆に提供するために、アリーナ席の他にバルコニー席やロイヤルボックスなどが設置され始めたためだ。需要によって観客席は、アンフィテアトルム型劇場のように均一に構築された「民主主義的」なものから、最大で6層に積み重ねられた「階級社会」を象徴するようなものまで、その姿を変えるようになる。このタイプの劇場においては、額縁舞台と観客席を隔離しようとする影響が様々な形で具象化し始めており、それに対して舞台の最前列のプロセニウム（張り出し舞台）と呼ばれる部分がより大きな意味合いを持つようになったのである。

ヨーゼフ・フルッテンバッハ  
王侯貴族のための宮廷デザイン案  
1655年

Josef Furttenbach: design for a princely household

このホールの間取りは八角形で、それを取り囲むような形で4つの舞台が設置されており、演劇のシナリオの流れによって順番に舞台を移すことが可能になっている。ホールの中央には直径が4mもある円形の土台が設置されており、場面に合わせてこの土台が回転することによって席にしている観客は全ての舞台をそのまま観劇できるようになっている。舞台の間に設置されている小部屋は食料庫となっており、祝宴や晩餐会が行われる際には、来賓をもてなせるようになっている。すべての舞台にはイタリアの劇場を見習ってプリズム型の回転柱（テラーリ）がパースペクティブを強調する配置で設置されており、背景を簡単に交換できるようになっている。この回転する観客席と、ひとつの空間の中にくつもの舞台を配置するというアイデアや手法を取り入れたデザイン案は時代を大きく先取りしたものであったため、これが再び注目され大きな意味を持つようになるには、20世紀を待たなければならなかった。

フランソワ・ド・キュヴィイエ  
ミュンヘンの旧宮廷劇場  
1751~1753年: 640席

François Cuvilliés the Elder:

Altes Residenztheater in Munich

選帝侯マキシミリアン・ヨーゼフ2世がミュ

ンヘン王宮内に作らせたこの小さな歌劇場は、当初は王宮内で行われる祝祭行事のために作られたものであり、棧敷席が設けられたバロック様式のイタリアの劇場を模したものであった。640席からなる観客席は、4層のバルコニー席と、28の棧敷席が蹄鉄状に配置されており、それぞれの身分階級に合わせて度合いが変化する装飾がなされていた。また祝宴を開催する際には、段差になっているアリーナ席を、地下に設置してあるジャッキ式の昇降機で舞台の高さまで持ち上げることが可能になっていた。26mの奥行きを持った舞台の中心軸の延長線上にはロビーを備えたエントランスが配置されており、その玄関ホールの上、すなわちバルコニー席の2層目と3層目の中間の高さには豪華絢爛なロイヤルボックスが配置されていた。このボックス席は舞台の正面に位置しており、建築的には舞台と同じようにホールの中でも一際注目が集まるように装飾され、演劇と宮廷生活との調和が強調されるようになっていた。第2次世界大戦によって破壊されてしまったこの劇場は、1956年には一部戦災を免れ現存していたオリジナルの装飾を利用して復元されている。

ルドルフ・シュタイナー  
ドルナッハの初代ゲーテアナム  
1913~1922年（消失）: 900席

Rudolf Steiner:

first Goetheanum in Dornach

アントロポゾフィーの提唱者であるルドルフ・シュタイナーは、ゲーテの著作「植物変体論」に大いに感化され、自然が創造するフォルム（造作）を自身の建築で表現しようと試みる。建築が精神とモラルに及ぼす影響が絶大なものであると確信していたからであり、「物理的なフォルムを視覚し、体で実感することは、『魂の進化』を覚醒させ、それが生み出す『観念的フォルム』は逆に『精神的な本質』を浮き彫りにする」と彼は述べている。この理論が形となって現れたのが初代ゲーテアナムで、コンクリートの岩石に浮かぶ木製の二重天蓋を載せたその形状は、内部空間も外観もすべて彫刻のような建築であった。講演会やミステリー演劇、オイリュトミー表現の実演を、900人の観衆を収容して行うためには、舞台と観客席の系統的な区分構成を実現させる必要が生じる。2つの大きさの異なる天蓋が融合するかのようになり、円形のホールに鎮座することによって、空間の二元性が引き起こす緊張が、『物理的』かつ『精神的』な超自然的要素の二元性を表現するよう意図されているのである。周囲を囲む円柱群と回廊は、舞台と観客席をひとつの空間に統合するための役割を担っている。

コンスタンチン・メリーニコフ  
モスクワのルサコフ労働者クラブ  
1927年: 1500席

Konstantin Melnikov:

Rusakov Workers' Club in Moscow

1917年に起こったロシア革命以後、ソビエト連邦では数千の国民会館や労働者クラブと呼ばれる、労働者階級層の創作能力の維持活動や、大衆を対象としたプロパガンダを行うための公共の施設が建設され、メリーニコフ

が手がけた最も有名な労働者クラブは、製造業に従事する集団を対象とした、催事場もしくは劇場として建設された。この建築が大いに評価されたのは、内部空間の構成と外観デザインとの一致性、またはこの建築のシンメトリー性である。日常は労働者として従事する人々が、外観にははっきりと見て取れる3つのホール内では、高尚な存在としてこの建築の中心に位置する舞台上での出来事を鑑賞できたのである。また観客席の形状は臨機応変に変換可能で、ホールの利用目的によって様々な形状へと変化する。それぞれの独立した空間ユニットは、形を変え個々の空間として利用可能で、またすべての空間を統合することによって、最大で1500人を収容する大ホールとして機能する。

アルヴァ・アールト  
エッセンのオペラハウス

1959年（コンペ）、1983~88年（実現）：  
1200席

Alvar Aalto:

opera house in Essen

「劇場建築の外観は、その文化的な使命と役割を視覚的に認識されるためにも、同じ都市に存在する協会や商業施設、工房などは一線を画すものでなければならぬ。古代において劇場とはただひとつのジャンルに対応していればよかったが、現代では演劇、オペラ、オペレッタ、もしくはバレエなど、すべて同一の劇場で行えることが求められており、その解決策を模索する必要がある」と、アールトは自身がこの建築に求めたものについて述べている。この劇場は、コンペが行われてから実現まで30年という長い年月を要しており、その結果、数あるオペラハウスの中でも、非常に意義のあるものとなっている。観客席は左右非対称なアンフィテアトルム形式を継承しており、棧敷席とボックス型のバルコニー席の背壁は波状形をしている。また3つあるホワイエはそれぞれ異なる階層に隔離して配置されている。この劇場の舞台（メインステージ、サイドステージ、バックステージ）の巨大な寸法には目を見張るものがあり、1200人を収容できるように意図された観客席は、この舞台と比べると、かなり小さいのではと錯覚させられる。

### 空間舞台

「空間舞台」という概念は、20世紀に入ってから、建築家のフリードリッヒ・キースラーによって提唱される。これは何よりも現代の劇作家や演出家、建築家が、再び観客席と舞台を建築的にも空間的にも融合させて一体感を持たせようとした流れが導いた結果である。バルコニー席の廃止、規則的に配置された額縁舞台、もしくは棧敷席の設けられたバロック劇場からの脱却、これが今日の劇場に求められる根本的な要素である。「自由な表現を志す演劇が求めるものは、既存概念にとられない劇場の形状であり、過去の荘厳華美な劇場ではなく、より可変性を備えたものである」、このスローガンのもと、ワンルーム型の劇場、ひとつの空間に舞台が多数同時に存在するもの、フレキシブルに可変する劇場、可動式の舞台と観客席を備えたもの、天井と床の高さが可変なもの、スタジオ型劇

場、そして全体主義劇場に至るまで、建築学上のひとつの結論として様々なものが発案、設計、計画されるのだが、しかしそれらが実現するケースはほとんどないのが実状である。

ハインリヒ・テスノフ

アドルフ・アッピア

アレクサンダー・ザルツマン

ヘレラウのジャック＝ダルクローズ・インスティテュート（ドレスデン）

1911～1912年

Heinrich Tessenow,

Adolphe Appia,

Alexander von Salzmann:

Jaques-Dalcroze Educational Institute

in Hellerau near Dresden

「テスノフ、ジャック、ザルツマンらがヘレラウのために設計したこの劇場ホールが、現代における芸術的な発展を意味する道標として意味を成してゆくのはひとつの事実だろう」、現地を訪れたル・コルビュジエは自身の日記にそう記している。アプトン・シンクレアにして「繊細な円柱に支えられた巨大な白い神殿」と評されたテスノフの劇場は、柿落とし公演からわずか2年後に母体である学術研究機関が第一次世界大戦の開戦によって経営破綻に追い込まれることになっても、今日までその壮大な姿を留めている。この教育施設の中心的な建築要素は、テスノフが革新的な現代舞台美術を実践していたアドルフ・アッピア（スイス）と共に設計した簡素にまとめられた四角形の空間であり、この空間は当時の最新技術の粋を集めて開発された照明システムを採用していた。この空間はワックスを含浸させた布地によって2層に包み込まれており、この布地と壁の間には、綿密に規則的に並べられた電球が配置されていた。それによってこの空間は、多種多様に拡散され、明暗鮮やかな、色調溢れる光の渦によって包み込まれたのである。

アンドール・ヴァイニングアー

球体劇場プロジェクト

1927年: 4500 席

Andor Weininger:

project for a spherical theatre

「この球体劇場に限って言えば、サーカス、そう普通の移動サーカスに最も影響を受けたと断言できる」、そうヴァイニングアーは語っている。この球体劇場は、革新的でありながらどうしても非現実的な印象を与えるのだが、彼自身は観客席と舞台の空間的な関係についてかなり具体的な建築学的探求と研究に取り組み、数多くのスケッチを残している。そこには座席列の配置案や、球体を幾何学的に分析して視線軸を導き出したものも含まれる。そして1927年にはバウハウス誌上で次のように述べている。「空間舞台や空間劇場、場所が力学的に作用する演劇・・・。ひとつの球体を建築学的に構築し、既存の劇場に代わる存在とする。観客は球体の内部において外周沿い、すなわちまったく新しい空間環境に身を委ねる。彼らはすべてを知覚できる状況にあり、なおかつ回転運動の中に身を置くことによって、まったく新しい物理的、

視覚的、聴覚的環境に身を置くことが可能になるのである。彼らがこの新しい可能性に直面した時、空間舞台上で繰り広げられる、よりインテンシブな、より可変的な、そしてより力学的な出来事を目の当たりにすることになる」

ヴァルター・グロピウス

エルヴィン・ピスカートル

全体主義劇場プロジェクト

1927年

Walter Gropius, Erwin Piscator:

project for a Total Theatre

グロピウスは、演出家のピスカートルと共に「全体主義劇場」を設計、彼自身はこの劇場を「よりフレキシブルな舞台を実現するための実験」、「巨大な光と空間の鍵盤楽器」と捉えており、舞台監督が自由自在に多種多様な演出を手がけられるようにと意図したのである。移動と回転が可能な観客席と舞台は、例えば舞台を低い位置に配置することによってプロセニウム型劇場の構築を可能とし、また舞台を中心に持つことで円形劇場として使用することを可能にする。またこの変換作業は、例え公演中であっても可能でなければならず、それが可能になることによってピスカートルが意図したように即座に観客を周囲で起こる出来事に引きずり込もうとしたのである。グロピウスは観客席の周囲にスクリーンを配置し、光の演出や映像を映し出すことで、例え周囲にいる群集がお互いに走り寄っていくような状況下にあっても、観客が雲の中や、荒れる海原のど真ん中にいるかのような錯覚を覚える状況を作り出そうとしたのである。この模型は劇場内における観客席と舞台の配置案をコンセプトとして形に示したものである。

フリードリッヒ・キースラー

エンドレス劇場プロジェクト

1924/25年（構造模型）: 10万人

Friedrich Kiesler:

project for an endless Theatre

フリードリッヒ・キースラーは、自身が想像するダイナミックな劇場建築について画期的かつ非現実的なイメージをいくつかのマニフェスト的な文章にまとめている。「時間を支配する劇場の空間舞台は、やはり空間の中で浮遊しているはずである。この舞台の地面は、自由な構造の下、支柱以上の働きをする。電動の観客席は舞台の球状をした核の周りを、帯状の軌跡を描きながら回り続ける。この舞台構造は曇りガラスとスチールによって構築された二重の壁面に囲まれており、舞台は終わりのないスパイラルを描いている。多種多様な平面同士は、エレベーターと細長い足場によって結ばれているが、観客席も舞台も、エレベーターもデッキも、すべて空中に浮遊しているかのように、色々な角度で空間を縦横無尽に横切り固定されている。建物自体は、橋梁建築のために開発された、ケーブルと足場を組み合わせた伸縮可能なシステムによって成り立っている。物語はこの空間の中で自由に拡大し、さらに具体的に発展してゆけるのである」

エリッヒ・メンデルゾーン

ベルリンのユニバース映画館

1928年

ユルゲン・ザヴァーデ

レーニン広場の劇場シャウビューネ

1975～1981年: 1000 席

Erich Mendelsohn:

Universal Cinema Theatre in Berlin

Jürgen Sawade

Schaubühne an Lehniner Platz

シャウビューネの劇場空間は、建築家と演劇の専門家の密接な協力関係によって誕生した。1975年、ユルゲン・ザヴァーデは取り壊しがすでに決まっていたメンデルゾーン設計の映画館を、改築して劇場として利用するためにペーター・シュタイン率いる劇団シャウビューネと意見交換を行い、画期的な劇場コンセプトを打ち立てた。すなわち観客と舞台の垣根を完全に取り除くというコンセプトである。それぞれの舞台はその使用用途に合わせて昇降装置によって高さを垂直方向に3m上下させることが可能になっており、さらに各々の舞台を区切ることで、いくつもの舞台を同時に平行して存在させることが可能になっている。この劇場空間は、それまでの劇場の形式をすべて再現することが可能になっており、さらにまったく新しい形の舞台の形状と様式を生み出せる可能性をも秘めている。断面模型の半分はメンデルゾーンの映画館を、他の半分は改築された劇場の構造を示している。

### セントエドワーズスクールの劇場・アートセンター・ギャラリー、オクスフォード „St Edward's School“

Architects:

Haworth Tompkins, London

Steve Tompkins, Joanna Sutherland

Structural engineers:

Price & Myers LLP, London

オクスフォードのセントエドワーズスクールの敷地内に建てられたノースウォールアートセンターは、300席の多目的劇場、リハーサル室、ダンススタジオ、そしてアートギャラリーを備えた施設である。この計画は、1873年の学校創立時から残されている境界線、そしてヴィクトリア朝時代のものとして記録され、スイミングプールに改修されていた建物とを一体として包含するものである。新しい建物部分を含めたこの3つの要素が、調和のあるスケール感をもった表通りの景観と、キャンパス内の新しい中庭を生み出している。建物の全体ボリュームは、表裏の両面からの入口があるホワイエによって大きく二分されている。全体構成は古い壁に沿って建てられた二連の「倉庫」というように考えられた。スイミングプールだった部分は、劇場として改修された。古いレンガ外壁は外観要素として見えるように保存され、その外壁の内側に、明示的な木造の新しい劇場が挿入された。屋根の勾配はより大きく変更され、照明用のキャットウォークを内包するとともに、施設全体の統一感のあるコンポジションを形成している。高窓は保存されたが、遮音ガラスがはめこま

れ、遮光用のシャッターも設置された。この古いスイミングプールのボリュームを反復しながら、新しい建物部分は古い境界塀からセットバックし、この境界塀を傷めることを避けるとともに、1階のギャラリーに北側からの外光を採り入れられるように計画された。既存の構造体を改修した部分は、仕上げ素材の微妙なニュアンスで明らかにされている。この建物のすべてのエリアは明確に若い使用者用にデザインされたが、同時に、一般に施設を公開することも想定されていた。そのため単純で、丈夫な仕上げとテクスチャーという点が重視された。内部の床仕上げはワックスをかけられた舗装用コンクリート板とされ、劇場部分はレンガの外壁に内包され、暗い色で塗装された木造のギャラリーに囲まれた空間として計画されている。外装にはオーク材の割り板が葺かれていて、1階部分と妻面の壁にはオークの細材による間隔の狭い縦格子が用いられている。広範な機能を収容するために新しい形態が古い構造体と結合する一方で、歴史的な都市景観は保存されている。このプロジェクトは290万ユーロという厳しい工事費のなかで、予定工期どおりに完成した。

aa断面図：  
既存建物部分の内部につくられた劇場  
bb断面図：  
新建物部分のホワイエ  
cc断面図：  
新建物部分の演劇スタジオ  
dd断面図（長手）  
S=1：400

配置図  
S=1：5000  
延床面積：1250 m<sup>2</sup>  
劇場部分：210 m<sup>2</sup>  
劇場収容人数：最大300人  
劇場形式：多目的ホール  
バックステージ部分：144 m<sup>2</sup>  
1 m<sup>2</sup> あたり工事単価：2754ユーロ

- 1 劇場部分照明用キャットウォーク
- 2 機械室
- 3 音響アンブ室
- 4 接続ブリッジ
- 5 調整室
- 6 演劇スタジオ上部吹抜
- 7 事務室
- 8 劇場部分バルコニー席
- 9 メザニン
- 10 演劇スタジオ
- 11 化粧室
- 12 店舗
- 13 通り抜け通路
- 14 劇場
- 15 ギャラリー／ホワイエ
- 16 ダンススタジオ
- 17 屋外パフォーマンス広場

平面図  
S=1:400  
3階  
2階  
1階

### アミリスヴィルの多目的センター „Pentorama Festhütte“ ミュラー・ジグリスト

Architects:  
Müller Sigrist, Zurich

Structural engineers:  
Kartec, Zurich (competition)  
INP Näf + Partner, Amriswil (construction)

スイスにある自治体アミリスヴィルの人口はわずか11500人ほどにすぎない。そのためトゥールガウ州の片田舎にあるこの小さな自治体が、2500人を収容する祭事場を保持していることを不思議に思う人は少なくない。さらに「Festhütte（フェストヒュッテ）」という名称も、通常の「Hütte（ドイツ語で小屋という意味）」という概念から連想させる小さな建物とはかけ離れており、我々をより困惑させる。それゆえか、その明確な五角形の形状から、この施設の経営サイドから公式に「Pentorama（ペントラマ：péntelはギリシャ語で『5』を意味する）」と名づけられたことになったのかもしれない。経営サイドはさらに、多種多様な利用に対応したこの施設に、周辺地域からの利用客を呼び込むためにも、この名称がマーケティング的にもより最適なものであると主張する。この施設は、近郊の若者が集まってくるディスコとして使用されるだけでなく、晩餐会、コンサート、スポーツイベント、演劇、結婚式、クリスマス市なども開催されており、その当然の結果として、多目的施設という枠を離れた、より魅力的な名称「フェストヒュッテ（祝祭小屋）」を冠した建築であると言える。この敷地には1907年に地元の射撃クラブが設けた木造建築があったのだが、新しい施設はその木造に対してほとんど関連性を見出すことは出来ない。単色の銅製ファサードに覆われたこの建築は、内向的な印象を与えるものとなっており、付属室に必要な開口部も穿孔処理を施した銅板で隠されている。唯一、外部に向かって開放されているのは、ファサード面から内側に引き込まれた上で全面ガラスを採用したエントランス部分だけであり、さながら利用客が洞穴に飲み込まれていくかのような印象を与える。比較的シンプルにまとめられたホワイエを通過すると、五角形のフェスティバルホールが広がり、レモンイエローとオリーブグリーンが織りなす極彩色が目に見え込んでくる。これは一見、繊維質的な印象を与えるものであるが、スリット処理が施された吸音パネルである。この吸音パネルの裏側に隠されているのは、2層の繊維質保護シートと、20cm厚のロックウール層、さらに技術の粋を集めて形成されたスチール製の屋根構造体であり、この構造体は重心を中心に取らない不均等なテントのような空間を作り出している。これは祝祭用のテントのような空間を作り出したかった建築家の意図が強く反映されたものであるが、その独特な形状にもかかわらず、この内部空間は音響に対する条件を十分に満たしている。さらにこのホールの形状は様々な用途に合わせられる自由度に秀でており、壁の一面に穿かれたかのようなステージの中心に向かってイスを配置することももちろん、スポーツイベントのニーズに合わせたイスの配置も可能となっている。また空間的に分離されている2つのギャラリーはそれぞれ平行して違うイベントに使用することが可能であり、利用者はもちろんそれをレンタル利用することも可能だ。付属室の配置も常軌を逸しており、五角形のホールの軸に対してシンメトリーに配置され、壁4面に対して平行に配置されている。その結

果、この建築を形成する面が構成され、様々な角度と、それに伴うラインの融合によって、自由な建築的外観が生み出されている。まさに住民投票を経てこの施設に5,000,000 CHFもの建築費を支出した勇氣ある地元住民のための、勇氣ある建築であると言える。

敷地図  
S=1:5000  
断面図・平面図  
S=1:800

建物体積: 21300 m<sup>3</sup>  
延床面積: 4230 m<sup>2</sup>  
ホール: 830 m<sup>2</sup>  
große Galerie: 160 m<sup>2</sup>  
kleine Galerie: 60 m<sup>2</sup>  
シート席: 1241席  
ディスコ: 2800人収容  
舞台面積: 140 m<sup>2</sup>  
1 m<sup>2</sup> あたりの建設費: 298 €

- 1 舞台
- 2 サイドステージ
- 3 搬出入口
- 4 出演者控え室
- 5 調理室
- 6 来客用クローク
- 7 ホワイエ
- 8 ベンチ／テーブル収納室
- 9 ギャラリー
- 10 設備室
- 11 会議室

### ナンシーのコンサートホール „L'Autre Canal“ ペリフェリーク

Architects:  
Périphériques, Paris  
Structural engineers:  
Ingerco, Paris

「L'Autre Canal（もうひとつのチャンネル）」とユース年代を対象に建設されたこのコンサートホールは名づけられている。ここでは聴覚障害を引き起こしかねない大音量のロックコンサートが行われるだけではなく（受付カウンターでは無料の耳栓を配布している）、ディスコやダンスイベント、シャンソンのコンサートなども開催されている。このプロジェクトの背景は、「Scène de Musiques Actuelles (SMAC)」と呼ばれる、フランスの文化庁主導の行われているプログラムで、青少年のための文化的施設網の整備と拡大をその目的に掲げており、すでにプレス、カーン、サン＝ティエンヌ、ルーアンなどの各都市にも同規模のコンサートホールがここ数年の間に完成している。それらプロジェクトの大部分が、交通の便のよい市内の中心地に位置する工業用地跡を再開発したものであり、ここナンシーでも数年来、市の北東に位置する中心部にも近い、19世紀から存在する工業地区の再生計画が進められている。居住施設や商業施設などに加え、建築学科の校舎も新たに計画されているため、このコンサートホールにとって、防音に関するコンセプトが非常に重要な要素となった。この問題を建築家は、防音に優れた堅牢なトーチカのような建築を設計することで解決し、ま

たファサードには蛍光管を規則的に配置することによって遠く離れた場所からもこの施設が認識できるようにしている。その結果、音という音を内側に完全に封じ込めつつ、外観は周辺施設にも打ち解けるかのような様相をみせながらも、その特殊な用途を主張している建築となっている。このコンセプトを成功に導いたのが「Fil Rouge (赤い糸)」と呼ばれるアイデアで、この赤いラインは建物全体を貫き通っており、4面のすべてのファサードにも見て取ることができる。深紅に彩られたエントランスはまるで洞穴のような様相を呈しており、人々を飲み込んで同色にまとめられたホワイエとカフェバーに誘う。壁と天井、床と建て付け設備のつなぎ目には曲線を採用することで面と面を繋ぎ、単色にまとめられた一体感溢れる空間は、以前この敷地にあった屠殺場を連想させるが、この器官を思わせる赤色のフォルムは、事務所や練習室、控え室などが設けられている2階の廊下部分に現れる冷たい印象を与える打放しコンクリートの鋭いエッジと明確なコントラストを作り出している。2つのコンサートホールの内壁は暗色のエキスパンドメタルに覆われており、それらは鉄筋コンクリートや防音パネルの前に固定されている。また可動式の舞台や、昇降式のシートは、観客数に応じた自由度の高い使用を可能なものとする。音楽家であればプロヤマ、ソロやバンドなどの要素に左右されることなく、楽器を完備した練習室を始め、ミキサーや録音機器などを完備したプロ仕様の録音スタジオも安価で借り受けられることも、このホールの特徴のひとつとして特筆に価するだろう。

建物体積：18100 m<sup>3</sup>  
 延床面積：3105 m<sup>2</sup>  
 メインホール：2200人収容  
 シート席：1300席  
 サブホール：315人収容  
 舞台面積：60 m<sup>2</sup>  
 1 m<sup>3</sup>あたりの建設費：320 €

- 1 ホワイエ (カフェバー併設)
- 2 サブホール
- 3 倉庫
- 4 搬出入口
- 5 DJスペース
- 6 メインホール
- 7 マルチメディアルーム
- 8 スタジオ
- 9 出演者控え室
- 10 ケータリング
- 11 事務所

敷地図  
 S=1:5000  
 断面図・平面図  
 S=1:800

## ニハルのシアター MGM モラレス+ガイルス+マリスカル・アルキテクトス

Architects:  
 MGM Morales+Giles+Mariscal arquitectos,  
 Sevilla  
 Structural engineers:  
 Francisco Duarte, Sevilla

ニハルはアンダルシア州のある小さな自治体で、近郊には現代になっても脈々と受け継がれているテラス形の果樹園がその都市の特徴となっているアルメリアが位置する。周辺に広がる複雑に入り組んで起伏に富んだ路地と、パティオと中庭が色とりどりのタイルに彩られた白色の平屋建ての住居にはアラビア文化圏であった歴史を色濃く残している。1988年に行われたアイデアコンペで最優秀賞に輝いた建築家が設計したこの新劇場は、街の中心地から離れた外縁に位置しており、その山麓という立地からか山羊たちが隣をのんびりと山を登ってゆく。それを背景に、ずらして配置された2つの立方体が、まるで巨大な鋼製配管のように水平方向、または垂直方向に歪曲され絡み合い、周辺の地形の特徴に溶け込んだ建築がそこには存在する。1階部分だけがこの2つの建物を融合しているが、ここには現在美術の展示スペースや、アートインスタレーションが設置された。コンペの審査条件のひとつとして、独立した展示用パビリオンがクライアントから望まれていたにもかかわらず、建築家はあえて劇場の基礎部分に組み込む手法をとったためである。その展示スペースの1階上には、部分的に屋根に覆われたパティオが広がるが、そこを通過して音楽スタジオが舞台入口にアクセスできるようにになっている。観客用のメインエントランスは、実はさらに1階上のレベルに位置しており、スロープを登ってパーカウンターとチケットカウンターが設けられたホワイエに到達する。ホワイエの全面ガラスには窓枠が存在せず、ガラス自体もほぼ認識できないかのような錯覚を与えるが、そこからは眼下に広がる街の白い住居が一望できるようにになっている。エキスパンドメタル製のファサードは、アンダルシア独特の猛暑のなかで揺らめくように見えるといった技術偏執的な印象を与えるが、それに対して屋内は無垢材床を始めとして、緑色の天井、さらに壁が赤色、黄色、橙色に彩られるなど、快適な居住性が追及されている。それらは夜間になると内部照明によって屋外にも極彩色の世界を映し出し、結果として伝統建築の色彩に溢れた中庭を連想させるのである。

敷地図  
 S=1:5000

建物体積：14916 m<sup>3</sup>  
 延床面積：2536 m<sup>2</sup>  
 メインホール：357席  
 舞台面積：142 m<sup>2</sup>  
 1 m<sup>3</sup>あたりの建設費：€ 158

- 1 展示室
- 2 出演者控え室
- 3 リハーサル室
- 4 奈落
- 5 オーケストラピット
- 6 アートインスタレーション
- 7 倉庫
- 8 舞台
- 9 メインホール
- 10 パティオ
- 11 スタジオ
- 12 メインエントランス
- 13 ホワイエ (パーカウンター併設)
- 14 フライスタワー
- 15 事務所

## ウェックスフォードのオペラハウス OPW + ケイト・ウィリアムス

Architects:  
 OPW with Keith Williams Architects, London  
 Structural engineers:  
 Arup Consulting Engineers, Dublin

1951年から開催されているウェックスフォード・オペラフェスティバルは、アイルランドの文化事業の基幹を成すイベントにまで成長したが、それには中世の趣を残す小さな旧市街地の中心で行われることによる独特の雰囲気が大きく寄与していることは言うまでもない。19世紀に起源を持つ王立劇場は、数々の改築や拡張工事にもかかわらず、殺到する観客に対して収容人数的にも限界に達し、機械設備や音響設備に関しても現代のニーズにそぐわないものとなってしまったのである。音楽祭の理事会から依頼されたOPWアーキテクトスが作成した建築鑑定は、要求されるキャパシティと機械設備のニーズを完全に満たすためには、新築しか道がないという結論に最終的には至り、その結果2003年には既存の劇場の取り壊し及び、その敷地に新劇場を建設するという決断が下されたのだ。既存の敷地に隣接する敷地を買い足す形で建設用地の拡大も果たすことはできたのだが、敷地へのアクセスが一本の細い路地に限られていたため、新たにケイト・ウィリアムス・アーキテクトスが関わっていた設計チームにとって、この工事現場の監督と管理、運営は非常に頭を悩ませるものとなった。メインホールのオライリー劇場の配置は、そのホールの規模から設計の初期段階から選択の余地はなかったが、その他のジェローム・ハインズ・ホール (コンサートや演劇が行われるサブホール) や、付属室などは、周辺の既存の建物から十分に距離を置いて配置することができた。遠く離れた港湾部に架けられた橋からの眺めが、この新劇場をひとつの建築物として認識する唯一の方法なのだが、劇場の入口がある通りからはやはり銅板製ファサードに覆われた劇場のフライタワー部の頂上部分しか眺めることができない。この建築の基幹部分のほとんどは復元されたジョージ王朝時代風建築に隠されており、この表面的な建物には事務所や出演者用の控え室などが配置されている。当然この部分には意図的にシンプルにまとめられたメインエントランスが設けられており、2つの入口ドアをくぐって足を踏み入れると、旧市街地の中心にあるが故の空間的制約を強く感じさせるが、エントランスの角を曲がると本来のホワイエが姿を現す。このホワイエは4階分の高さを穿った吹き抜けが天窗まで開けており、各階のバルコニーからの視覚的コンタクトや、空間的な寛容さも相まって、オペラ劇場の独特の社交界的雰囲気を作り出している。5階には市街地や港湾部、海面などのパノラマが楽しめるギャラリーが設けられており、この建築にスペクタクルさという要素を加えている。驚くべきはこの巨大な劇場が小規模な建築が集まって形成されている居住区に見事に溶け込んでいる点で、これもこのプロジェクトを大きく評価できる点である。蹄鉄のような形状をした内部空間には、全面にウォルナット壁材が採用されており、伝統的で高貴な印象を与えている。

敷地図  
S=1:5000  
平面図・断面図  
S=1:800

延床面積: 7235 m<sup>2</sup>  
メインホール: 780席  
サブホール: 184席  
1 m<sup>3</sup> あたりの建設費: 900 €

- 1 エントランス
- 2 ホワイエ
- 3 メインホール
- 4 舞台
- 5 サブホール
- 6 事務所
- 7 出演者控え室
- 8 バー
- 9 フライタワ
- 10 パノラマギャラリー

## レリスタッドのシアター／コンベンションセンター „Agora“ UNStudio

Architects:  
UNStudio, Amsterdam,  
with B+M, Den Haag (Realisation)  
Structural engineers:  
Pieters Bouwtechniek, Almere

オランダのフレヴォラント州が現在位置する地域は、実に60年前まではゾイデル海と呼ばれた北海に面した湾岸部だったのだが、新しい都市の発足のために進められた干拓開発によって、それらは消滅し、その結果1967年には州都のレリスタッドが誕生している。しかし都市開発時に掲げられた人口12万人という目標は、現在に至っても大きくその目標には達していない。隣接するアルメレ市が、首都のアムステルダムにより近いという長所を活かして瞬間に拡大して大ベッドタウンに成長したのに対し、レリスタッドの市街中心部の大部分は、未だに未開発に終わってしまっているからだ。この決して経済的に魅力的とはいえない地域に新しく建設されたUNStudio設計の劇場『Agora』は、この地域に文化的な輝ける未来と繁栄をもたらせるために突然他の惑星から降り立った一隻の宇宙船のような印象を与える。典型的な薄暗い真冬の日々においても、蛍光橙色の建物は人々の気分高揚に、さらにダイナミックなフォルムは、たとえ施設内でイベントが行われていない日でも、その「劇的な存在感」によって街の活性化に寄与している。この敷地には、図書館や屋内プールを併設した多目的施設、コンベンションセンター『Agora』が70年代に建てられたが、とても魅力的な建築であるとはいえず、結果2004年には取り壊されている。この新劇場は、都市再生計画の第一歩となる建築物であり、ウエスト8による多彩な都市計画マスタープランに沿って2015年までには周辺地域の開発も完了する予定で、その結果、現在は緑の草原に孤立するまるで芸術品であるかのような印象を与えるこの劇場も、新築される周辺の建物や区画に完全に融合されるはずである。明確な立方体という形状を成す19 mにも達する舞台のフライタワ一部と2つのホールは、プリズム状に折られたスチール製のファサードに包み隠されており、結果、このファサードは開演

まで舞台を観客席から隔離する緞帳のようでもありと解釈することができる。ファサードの色調の異なる橙色は、光の屈折をさらに強調し、開口部などはパンチングメタルを採用することによって極限までカモフラージュされている。(DETAIL誌ドイツ語版 2007/12月号 1424ページ参照)。視線や音響に対する厳格な要求が生じない2つのホールの間にある空間は、直角という概念から離れたデザインが施されており、その結果、ホワイエ部は対角線上に長く引き伸ばされつつ天井中央開口部に向かって閉塞してゆくというダイナミックな形状でありながら、各空間を繋ぐ役割を確実に果たしている。それぞれ異なった空間クオリティーを発揮する各スペースには、各々に割り当てられた極彩色によってさらにアクセントが添えられている。ホワイエはフレッシュピンクによって彩られ、メインホールのブラッシュレッドは、典型的はウィーン歌劇場のような快適な空間を形成、さらに四角形のサブホールは、「多目的ブラックボックス」というコンセプトの元、黒色に統一することでその中立性を確立している。控えめな藍色にまとめられたコンベンションスペース (350 m<sup>2</sup>) は、それぞれ独立したホワイエとバルコニーを備えた3つの多目的ホールに区切ることが可能となっている。この施設のファサードとメインホールのデザイン的な統一性を確立させているのが、プリズム状に折り曲げられたその形状であることは一目瞭然である。すべての壁パネルの一枚一枚の位置は、音響の専門家によって設計段階から専用のプログラムによってシミュレーションされており、子供劇場からミュージカルまで、すべての演目に対応して計算し尽くされた最高の音響を実現できるようになっている。また可動式の音響パネルがフライタワ一部に設置されている舞台自体も、753席という収容人数の規模に対して、かなり余裕を持った700 m<sup>2</sup>もの面積が確保されているが、これは出来るだけ大規模な演目を実現するために必要な広さであり、意図的に設けられたものである。60人の楽員を収容するオーケストラピットは、床面の昇降装置が組み込まれており、メインホールでイベントが行われる際には、緞帳の前に位置する舞台として使用することが可能になっており、これは夜間の開演準備を舞台裏で同時に行えるよう考慮された結果である。サブホールは207人を収容するが、黄色のシート席は壁に収納することが可能で、250 m<sup>2</sup>という広面積は晩餐会やデイスコ会場に早変わりする。この多目的施設は、その各ホール、各舞台、各ホワイエをそれぞれ連動させて有効活用する可能性に富んでおり、総使用面積を合計すると2100 m<sup>2</sup>にも至り、その結果、最高で1800人をも収容することが出来る。この施設は、その建築的スペクタクル性も理由のひとつとなって、現在では注目のコンベンションセンターとしてオランダ全土から年間約6万人もの利用客が訪れるが、それらに平行して10月から5月までの劇場シーズンにおいて実に150演目が上演されている。

敷地図  
S=1:5000

ウエスト8による都市計画マスタープランに沿って、周辺施設は2015年までに完成する予定 (灰色表示)

建物体積: 30000 m<sup>3</sup>  
延床面積: 7000 m<sup>2</sup>  
メインホール: 753席  
舞台面積: 195 m<sup>2</sup>  
バックステージ: 500 m<sup>2</sup>  
サブホール: 207席  
舞台面積: 81 m<sup>2</sup>  
バックステージ: 135 m<sup>2</sup>  
1 m<sup>3</sup> あたりの建設費: 413 €

断面図  
S=1:800

- 1 メインエントランス
- 2 チケットカウンター
- 3 受付カウンター (コンベンション開催時)
- 4 クローク
- 5 出演者控え室
- 6 ホワイエ
- 7 バー/カフェテリア
- 8 舞台
- 9 メインホール
- 10 倉庫
- 11 関係者入口
- 12 搬出入口
- 13 レストラン
- 14 事務所
- 15 吹き抜け
- 16 出演者用ホワイエ
- 17 調理室
- 18 多目的ホール
- 19 サブホール
- 20 バルコニー席 (メインホール)
- 21 テラス

## アルメレのシアター／カルチャーセンター „De Kunstlinie“ SANAA 妹島和世+西沢立衛

Architects:  
SANAA  
Kazuyo Sejima + Ryue Nishizawa, Tokio  
Structural engineers:  
Sasaki Structural Consultants, Tokio

オランダのアルメレは人工的に構築された都市である。この都市は1975年にゾイデル海を開発してできた干拓地に誕生した都市であり現在では約18万人の人々が暮らしている。西方約25 kmに首都のアムステルダムがあるその立地条件の良さから、アルメレは急成長の恩恵を受けることになり、都市の誕生から20年しか経っていないにもかかわらずもはやただのベッドタウンとしてのイメージを払拭しつつある。その結果、1994年には街の中心地および文化的施設のコンペが行われレム・コルハウス (OMA) が見事栄冠を勝ち取るも、それ以降、世界的に著名な建築家による建築がアルメレ市内の至る所に実現、前述のOMAを筆頭に、メカノー、クリスチャン・ド・ボルザンパルク、クラウス・エン・カーン、オールソップ&シュテルマー、レネ・ファン・ユークらの作品は、湾岸沿いの遊歩道から眺めることができる。これら建築群に並んで、文化センターに隣接して比較的控えめな佇まいを見せているのがSANAAが手がけた新市立劇場である。この建物の三辺は人工的に整備された水面に面しており、絵画や美術のためのスタジオ、練習室、プロ用、もしくはアマチュア用の録音スタジオ、演劇やコンサート、会議などが行われるオーディトリウムなどの様々な用途に合わせた空間が直線的に並んでいる。一際目を引くのは、その空間の密集性で、それでも一

部の部屋が短い廊下、もしくはパティオを介してアクセスしなければならないことを除いて、ほとんどの空間は直接室内にアクセスできるようにになっている。建築家が意図したこととは、空間的ヒエラルキーが存在しない建築を実現することで、劇場から廊下に至るまで、すべての空間に同等のクオリティを持たせることだった。そのため、廊下も劇場ホールと同じように水面を景観に取り込むために全面ガラスで空間を開放してあったり、オーディトリウムも子供用の工作室と同じ長方形を成していたりすることに疑問を感じる必要はないのである。また、エントランス自体も、劇的な要素を一切排除し、網目状に構成されたファサードに溶け込んでいる。夜間になって初めて、この建築は注目を一身に集めることになる。この建築の巨大ブロック部分である劇場や、レストランが光を放ち始めると、湾岸の遊歩道を散歩する人々の興味を引き、人々はオランダ的な習慣に従うかのように、この建築の内部で起こっているイベントを覗かずにはいられなくなるのである。

延床面積: 19085 m<sup>2</sup>  
 メインホール: 978席  
 舞台面積: 968 m<sup>2</sup>  
 サブホール: 350席  
 舞台面積: 400 m<sup>2</sup>  
 ミニホール: 147席  
 舞台面積: 216 m<sup>2</sup>  
 総建設費: 75,000,000 €

敷地図  
 S=1:5000  
 断面図・平面図  
 S=1:1000

- 1 エントランスホール
- 2 チケットカウンター
- 3 カフェ
- 4 レストラン
- 5 ホワイエ
- 6 オーディトリウム
- 7 倉庫
- 8 演劇スタジオ
- 9 ダンススタジオ
- 10 パティオ
- 11 ガレージ/搬出入口
- 12 サイドステージ
- 13 音楽スタジオ
- 14 レコーディングスタジオ
- 15 美術スタジオ
- 16 暗室
- 17 P Cルーム

### ミネアポリスのシアター „Guthrie-Theatre” ジャン・ヌーヴェル

Architects:  
 Ateliers Jean Nouvel, Paris  
 Architectural Alliance, Minneapolis  
 Structural engineers:  
 Ericksen & Roed, St. Paul

1963年、英国人演出家のタイロン・ガスリーがミネアポリスに欧州の影響を色濃く受けた劇場を設立すると、この劇場は時間と共に名声を得て米国でも指折りの名劇場と呼ばれるまでに至る。3方に観客席を備え、僅かながらアシンメトリーな形状をしたこの劇場は、「ガスリー」と呼ばれ親しまれてきたが、それは伝統的な演劇だけではなく実験的

な演劇や、俳優の育成にも積極的に取り組まれてきたからだった。そして40年を経た現在、様々な劇場の使用目的に反対して空間的な限界に達したこともあり、新しい文化的施設を建設することによって同時に都市の過疎化に歯止めをかけようとする試みがなされたわけだが、これは何もミネアポリスに限ったことではなく、同様の問題に悩む都市で取られている一般的な手法である。この流れの中でミネアポリスでは、ヘルツォーク&ド・ムロンがウォーカー・アートセンターの増築を手がけたのを始めとして、シザー・ベリによる公立図書館、マイケル・グレイヴスによるミネアポリス美術館・新館などが完成している。州や市などの公的機関と民間の機関が協力してガスリー劇場のために打ち立てたプログラムは多種多様な可能性が考慮されたものであり、その結果、既存の劇場の流れを汲むアリーナ型の劇場に、典型的な長方形の額縁舞台も併設、さらにミニスタジオも設けられることとなった。そのための敷地に選ばれたのがミシシッピ川に面した穀物の元貯蔵地であり、工業地帯として発達したミシシッピ川沿いの景観を観客が楽しめるよう3つのシアターを高所に配置するというコンセプトを提唱したジャン・ヌーヴェルが、この設計を手がけることとなったのである。全長53 mにも及ぶ片持ち梁型の構造体と垂直や水平に直方体が積み重ねられたかのような形状は、隣接する巨大な穀物用のサイロ跡のような工業建築物を連想させるが、それによって周囲の建物との関連性を保ちつつ、光沢のある藍色のメタルプレートをファサードに採用することによって逆にそれらの建物との明確なコントラストを生み出している。川沿いに走る遊歩道と、道路を結ぶ、いわゆる繋ぎ目とも表現できる部分がこの建築を垂直方向に明確に2つのブロックに分けており、この12 m幅の空間の端から利用客は劇場に足を踏み入れる。エントランスから伸びる2つの長いエスカレーターによって直接4階に上った観客は、そのフロアに広がる細長い空間から両サイドに配置されている劇場にアクセスすることが出来るのだが、そのためには片持ち梁型の構造体の内部に設けられた緩やかなスロープを進み、折り返し地点で劇的な川沿いの景観を堪能してから5階に上がる仕様になっている。そこは上階のホワイエが広がっており、観客席への入口はもちろん、バーも併設されており、床に穿かれた吹き抜けによって下階のホワイエと空間的につながるように意図されている。8階にあるスタジオシアターはエレベーターでのみアクセス可能で、このシアターのホワイエは黄色のガラスボックスとして壁面に懸架されており、この建築の空間的最終地点としてある意味最も印象に残る遊歩道の景観を眼下に広げている。彩色ガラスを通して眺めることによる景観の変化、鏡面加工された表面がもたらす意図された方向感覚の喪失、ガラスの床材からの高さのある展望、狭い空間と距離のある空間を融合させる試み、これらはすべて豪華な空間を演出する典型的なヌーヴェルの設計に欠かせない要素である。

敷地図  
 S=1:5000  
 断面図  
 S=1:1500

延床面積: 15800 m<sup>2</sup>  
 メインホール: 1100席  
 サブホール: 700席  
 スタジオ: 250席  
 総建設費: 97,000,000 €

平面図  
 S=1:1500

- 1 エントランス
- 2 ロビー
- 3 レストラン
- 4 ショップ
- 5 リハーサルホール
- 6 小道具室
- 7 ローワー・ホワイエ
- 8ブリッジ
- 9 メインホール
- 10 サブホール
- 11 アッパー・ホワイエ
- 12 展望台
- 13 ホワイエ (スタジオシアター)
- 14 スタジオシアター